

お釈迦様最後の旅③

令和2年11月第2週放送

---

ナーディカ村をあとにして、お釈迦さまはヴェーサーリーに向かいます。

そこでも多くの者に教えを説くのですが、雨期に入り、修行僧たちに雨期の定住の修行に入るように指示をした後、弟子アーナンダを伴い郊外のパールヴァ村で自らも修行に入られました。そこで病にかかり、激しい痛みを襲われます。

お釈迦さまは「弟子たちに別れを告げないで亡くなるわけにはいかない」と気持ちを強くして、この病の苦しみを耐え忍びます。そして静養をし、ほどなく病から回復されます。

回復されたお釈迦さまに弟子アーナンダは・・・

「修行僧たちは皆、お釈迦さまがこのまま亡くなられてしまうのではないかと茫然自失していましたが、今はお釈迦さまが私たち修行僧に最後の教えを示さないうちはお亡くなりにならないだろうと安心しています」と話します。

するとお釈迦さまは・・・

「何をわたしに期待するのか。今までわたしは分け隔て無く一切の事を伝えてきた。握り拳に何か隠すような秘密の教えなどは無い。」と語り さらに・・・、

「私は修行僧を導く者だとか、修行僧が自分を頼っていると考えたことはない。そのような者が何を語るというのだ。私はもう年老いた。古ぼけた車が革紐の助けによってやっと動いているように、私もそのようなものの助けによってもっているのだ。しかし、一切のわだかまり

## 『 禅のこころ - 曹洞宗 - 』

---

を心にとどめることなく、整えて精神統一がなされていれば身体は快適であることができるのだ」と話し、

「それぞれ自らを大きな海における島とし、自らをたよりとし、他人をたよりとせず、教えをよりどころとして、他のものをよりどころとしないでいきなさい」と諭します。

そしてそれは、身体と心と諸々の事柄に意識を向け、むさぼりと憂いを除く事によってなされると重ねて諭します。

お釈迦さまは自らが亡き後でも、誰であっても学ぼうと望むものはこのようにすれば良い、という事をアーナンダに伝えたのです。

そしてお釈迦さまの教えの旅はさらに続くのでした。

— 終 —